

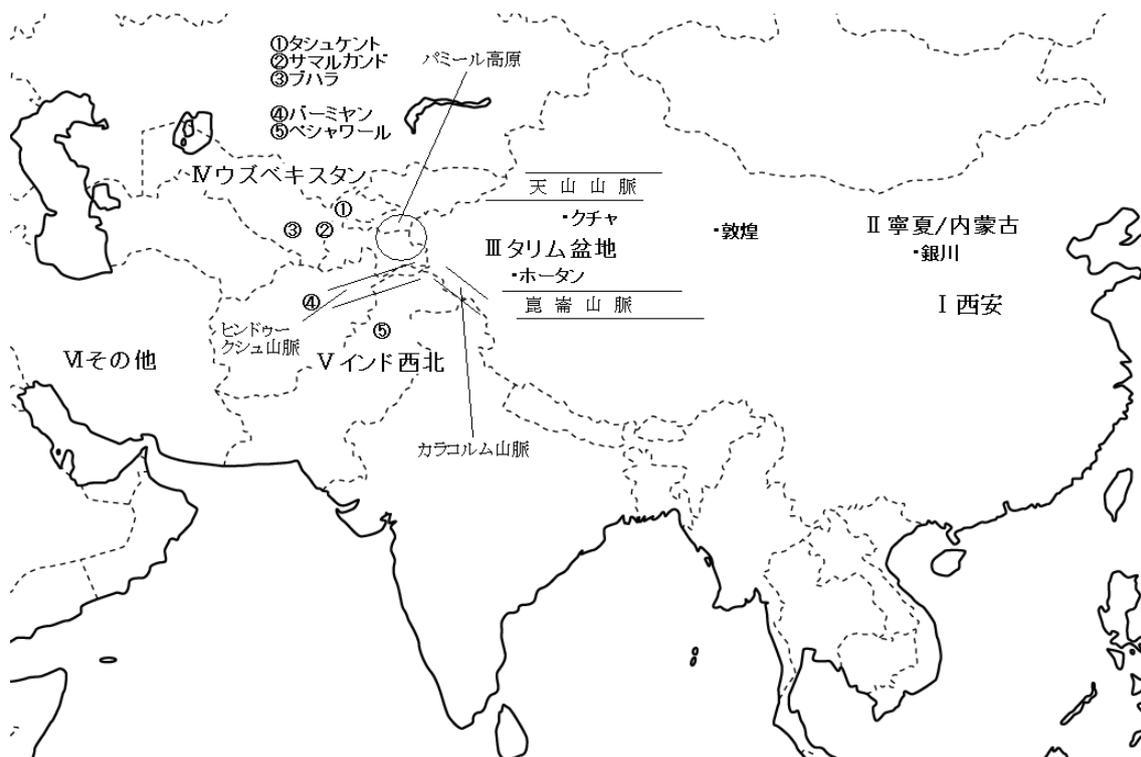
シルクロードの文字をたどる

—西安からソグディアナを経てインド西北に到る—

愛知県立大学外国語学部 吉池孝一

1. はじめに

シルクロード(絹の道)というと、狭義には、タリム盆地周辺を經由して、ユーラシアの東と西を結びつける交易路を指す。このシルクロードに点在した古文字資料の展示を、平成 21 年現在、愛知県立大学 E510 研究室内でおこなっている。今回の講座では、そのなかから幾つかの資料を選び出し、東より西にシルクロードをたどってみようとおもう。そこで、まずは下の地図をご覧ください。



まずは、中国の西安(I)の資料をみる。ここには前漢の武帝の発行に係る貨幣やソグド人墓碑の拓本がある。西安は、かつて東西交流の前線でもあり、遠くソグディアナ(現ウズベキスタン一帯)の地からソグド人が交易のためにこの地にやってきた。そのソグド人の墓から、近年のことであるが、ソグド文字と漢字を並べて刻した墓碑が発掘された。碑銘によると 6 世紀のものである。その内容はなかなか面白い。墓主である父親はゾロアスター教徒であろうが、その 3 人の息子達の漢訳名は仏教との係わりを示しており、東西の交流をよく物語るものとなっている。

次にやや西北に進み、寧夏(ネイカ)と内蒙古(II)の地に寄り道をする。ここには不思議な文

字がある。一見漢字のようであるが、よく見ると漢字とはまったく異なっている。西夏文字である。今回は、この文字で書かれた貨幣や彩色絵がほどこされた布本を見ることにする。さらに西方に足をのばし、有名な敦煌を通り過ぎて、タリム盆地(Ⅲ)に到る。盆地の北端と南端を周遊する。さまざまな民族のオアシスがあり、見慣れない文字の資料がある。ここまでが現中国領内ということになる。

いよいよパミール高原を越える。そしてウズベキスタン共和国(Ⅳ)に到ると景色は一変する。ここは六朝から唐代にかけて中国との東西貿易に活躍したソグド人の本拠地があったところであり、その古地名をソグディアナと称する。中国西安からみて、西の果てであるこの地から、驚くべきことに、漢字が鑄込まれた貨幣が出土する。これは、中国から運ばれてきたものではなく、この地で発行された漢字銭なのである。その証拠に、貨幣を裏返してみると、ソグド人の都市国家のマークがある。漢字西漸の西限ということになる。

さて、ヒンドークシュ山脈の北側すなわちウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯に足をのばすと、ギリシア系のバクトリア王国の故地がある。アレクサンドロス大王(在位。紀元前 336-323 年)の没後、その東征軍の一部が興した王国である。この地ではギリシア文字の銘文をもつギリシア様式の貨幣が発行された。これはアレクサンドロス大王が発行したギリシア様式の貨幣の影響によるものである。その後、バクトリアの勢力はヒンドークシュ山脈を越えて、インドの西北部に進出し、紀元前 2 世紀頃には独特の文化を花開かせ、興味深い貨幣を発行した。詳しくは後で述べるが、ギリシア語とガンダーラ語を表裏に刻印した2言語併用貨幣を発行したのである。このような2言語併用貨幣の発行はおそらくは史上初の試みであろう。なお、この王朝はインド・グreek朝とも呼ばれている。我々もバクトリアの人々の後を追って、ヒンドークシュ山脈を越えて、インドの西北部(Ⅴ)に向かうことにする。

インド西北部ではバクトリア系の王による支配の後、幾つかの民族の興亡があり、紀元 1 世紀中頃にはクシャン族のクシャン朝が興った。その中心部はガンダーラであり、現在のペシャワール付近とされる。2世紀中ごろには、あの有名なカニシカ王がこの地を治めた。カニシカ王が発行した貨幣は、なかなかユニークで、なんとその銘文は、ギリシア文字で書かれたバクトリア語(イラン語系統)となっている。なお、ご存知のようにガンダーラは大乘仏教の情報発信地でもある。

最後に、その他(Ⅵ)としてアレクサンドロス大王の東征に関わる資料をみる。なお、今回紹介する資料の大半は各地の貨幣であり、したがって“貨幣の道”をたどるといってもよいくらいである。

2. 資料紹介(実物を展示)

さて前置きはこれくらいにして、今日は、愛知県立大学E棟 510 室で展示している実物を持参したので、ひとつひとつ紹介する。

I 西安

01.前漢の五銖銭 紀元前 118 年～

【現在】中国・西安市。【古】前漢時代。漢字。

(表)貨幣単位の“五銖”。漢字の篆書体。

西安出土。初鑄は前漢・武帝の元狩五年(紀元前 118 年)とされる。

02.ソグド人墓の墓誌拓本 紀元 580 年

【現在】中国・西安市。【古】北周大象二年(580)。漢字とソグド文字。

(右)ソグド文字・ソグド語。(左)漢字・漢文。

西安出土。ソグド人墓の墓誌拓本。子供たちによって、墓主である史君(ソグド人の)がその妻と共に合葬されたこと等が記されている。

II 寧夏/内モンゴ

03. 西夏錢・貞觀元寶 紀元 1101 年～1113 年

【現在】中国・寧夏省／内モンゴ。【古】西夏国・貞觀年間(1101～1113)。西夏文字。

漢字を模して創製された文字。解読されている。(上)“徳”、(右)“觀る”、(下)“寶”、(左)“根源”。

04. 西夏・錢型の札 紀元 1036 年～1227 年

【現在】中国・寧夏省／内モンゴ。【古】西夏時代。西夏文字。

内宿待命とある。(左)“内”、(右)“宿す”、(上)“詔”、(下)“留める”。宮廷での宿営が許されていることを示す文。

05. 西夏文布本 紀元 1036 年～1227 年

【現在】中国・寧夏省／内モンゴ。【古】西夏時代。西夏文字。

手書きの行書体西夏文字と絵。絵因果経のようなものか。

III タリム盆地周辺

06. 西域の漢字木簡 時代不明

【現在】中国・西域出土。【古】時代地域不明。漢字木簡。

上下に木簡の結び目がある。“祖母”、“亦曰”などが読める。

07. ウイグル文字の銅貨 紀元 9 世紀～13 世紀

【現在】中国・タリム盆地周辺。【古】西ウイグル国時代。ウイグル文字。

(表) 上 küI(名誉ある) bilgä(賢明なる) 左 tängri(天)

下 bu γ u γ (ブク) ui γ ur(ウイグル) 右 xa γ an(可汗)。

(裏) 上 il(国家を) tutmīs(保てる)。下 yarlı γ (勅命) ingä(に於いて)。

08. 龜茲五銖錢 紀元 5 世紀～7 世紀

【現在】中国・クチャ。【古】龜茲国時代。漢字とブラーフミー文字。

2言語併用貨幣。(表) 貨幣単位の“五銖”。(裏) ブラーフミー文字・トカラ語。下は数字“50”。

上は不明。玄奘『大唐西域記』の屈支国(龜茲)の個所に“小銅錢”とある。

09. 新疆馬錢 紀元 2 世紀後半

【現在】中国・ホータン。【古】于闐国時代。漢字とカローシュティー文字。

2言語併用貨幣。(表) 貨幣単位の“六銖錢”。(裏) カローシュティー文字・ガンダーラ語。7 時の位置より反時計回りに“maharaja”(大王)と読める。

IV ウズベキスタン

10. ソグド錢・ブハラ開元通寶 紀元 7 世紀～8 世紀

【現在】ウズベキスタンのブハラ。【古】ソグディアナの都市国家“安国”。漢字。

(表) “開元通寶”。(裏) ブハラの紋章(支配者のマーク)。中国・唐の高祖が武徳四年(621)に

発行した“開元通寶”を模したものとされる。漢字西漸の西端。

11.ソグド銭・シシュピール王銅貨 紀元7世紀中期

【現在】ウズベキスタンのサマルカンド。【古】ソグディアナの都市国家“康国”。ソグド文字。
(表) 上“šyšpyr”(シシュピール)、下“MLK’”(王)。(裏) サマルカンドの紋章(支配者のマーク)。

12.ソグド銭・タルナビッチ王銅貨 紀元7世紀～8世紀

【現在】ウズベキスタンのタシュケント。【古】ソグディアナの都市国家“石国”。ソグド文字。
(表) 上“γwβw”(王)、中央チャチ地方の紋章、下“trnβč”(タルナビッチ)。(裏) 雪豹とされる。

13.ソグド銭・王肖像銅貨 紀元7世紀～8世紀

【現在】ウズベキスタンのタシュケント。【古】ソグディアナの都市国家“石国”。ソグド文字。
(表) ソグド文字、中央に紋章。(裏) ソグド王の肖像。ギリシア様式の打刻貨幣。

V インド西北

14.バクトリア銭・ミランダ王銀貨 紀元前2世紀

【現在】パキスタン北部一帯。【古】インド・グreek朝。ギリシア文字とカローシュティー文字。2言語併用貨幣。

(表) ギリシア文字“basileōs sōtēros menandrou”救済者たる王メナンドロス。

(裏) カローシュティー文字“maharajasa [tratarasa] menamdrasa”[救済者たる]大王メナンドロスの。

15.クシヤン朝銭・クジュラ・カドフィセス王銅貨 紀元1世紀後半

【現在】パキスタン一帯。【古】クシヤン朝。ギリシア文字とカローシュティー文字。2言語併用貨幣。

(表) ギリシア文字“basileōs sōtēros ……”救済者たる[王ヘルマイオスの]。

(裏) カローシュティー文字“…kušana yavugasa…”クシヤン族の酋長[クジュラ・カドフィセスの]。

16.クシヤン朝銭・カニシカ王銅貨1 紀元2世紀中頃

【現在】パキスタン一帯。【古】クシヤン朝。ギリシア文字・ギリシア語。

(表) ギリシア文字“…basileus basi[leōn]…”諸王の王[カニシカの]。

(裏) ギリシア文字“nanaia”ナナイア(女神の名)。

ギリシア文字のB、A、Ωに相当する字形はバクトリア以来のものとは異なる。

17.クシヤン朝銭・カニシカ王銅貨2 紀元2世紀中頃

【現在】パキスタン一帯。【古】クシヤン朝。ギリシア文字・バクトリア語。

(表) ギリシア文字“…shao kaneshki…”カニシカ王の。(裏) ギリシア文字“miyro”ミイロ(神名)。

ギリシア文字でバクトリア語(イラン語系統)を表記する。

18.シュロ樹葉断片の仏教文書 紀元2世紀～3世紀

【現在】アフガニスタン・バーミヤン。ブラーフミー文字。

ブラーフミー文字で書かれたサンスクリット語か。近年、バーミヤン一帯から、カローシュティー文字やブラーフミー文字で書かれた仏教経典が多量に発見された。

VI その他

19.フィリッポスII世の銀貨 紀元前4世紀

【現在】ギリシア一帯。【古】マケドニア。ギリシア文字。

(表) 月桂冠を戴いたゼウス像。(裏) ナツメヤシを手に持った騎馬像。“Philippou”フィリッポス

の。フィリッポスⅡ世はアレクサンドロス大王の父親。

20.アレクサンドロス大王の銀貨 紀元前4世紀

【現在】イラク。【古】バビロニア発行。ギリシア文字。

(表) ライオンの頭皮を被ったヘラクレス像。大王自身ともされる。

(裏) 椅子に腰を下ろしたゼウス像。右に“Aleksandrou”アレクサンドロスの。

このタイプの4ドラクマ銀貨はアレクサンドロスの東征とともに東方世界に広がった。

21.パピルス断片のギリシア文書 紀元2世紀～6世紀

【現在】エジプト。手写ギリシア文字。

ギリシア文字・ギリシア語の商業文書。

22.アラム文字の獣皮文書 時代不明

【現在】イラク一帯。【古】時代・地域不明。東方アラム文字。

アラム文字より後のソグド文字やウイグル文字ができた。さらに東漸しモンゴル文字や満洲文字となった。

3. 貨幣の道・文字の道

以上、シルクロード(絹の道)の文字資料を見てきたが、今回は貨幣を多めに用意した。それというのも、シルクロードは東西の「貨幣の様式」が伝播した道、すなわち貨幣の道でもあるということを知ってもらいたいのである。また、貨幣には文字が書かれている。したがって、文字が運ばれた道ということでもある。これより、先の地図によって、貨幣の道・文字の道を確認する。

3-1. 貨幣の様式

いま貨幣の様式と言ったが、ここで言う貨幣の様式とは何か。貨幣は、円形か方形かなどの形態、打刻か鑄造かという製造法、支配者名・神名・貨幣単位・年号などの銘文内容とその表現形式、銘文に用いられる文字と言語の種類などにおいて、地域や時代の別により一定の型を持っている。このような一定の型を「貨幣様式」と呼ぶのである。

そこでユーラシアの古代貨幣をごく大雑把にながめると、そこに幾つかの様式のあることを見て取ることができる。ギリシア文字で王名の属格(～の)を刻印した銘文を持つギリシアの円形打刻銭、漢字による貨幣単位や年号などの銘文を持つ中国の円形方孔鑄造銭などである。前者をギリシアの代表的な貨幣の様式として「ギリシアの貨幣様式」と呼び、後者を中国の代表的な貨幣の様式として「中国の貨幣様式」と呼ぶことにする。本講座では、シルクロードに沿って、貨幣そのものではなく、貨幣の様式がどのように伝わったかということを見る。

3-2. 三つの出来事

さて、下限を紀元8世紀、中国でいえば唐代中頃までとして、シルクロードの貨幣を俯瞰すると、そこに三つの出来事を見て取ることができる。

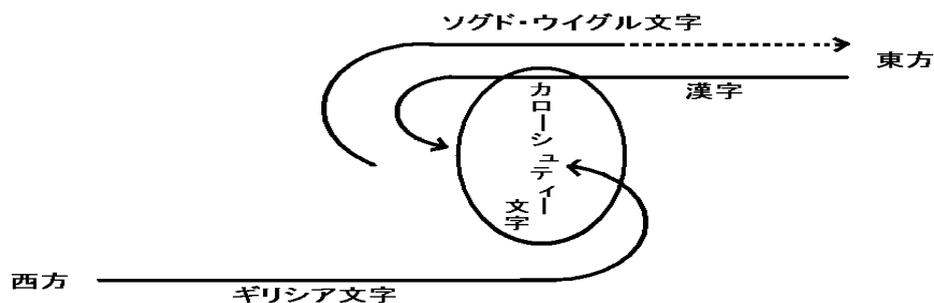
第一はギリシアの貨幣様式の東漸¹。

¹ 田辺 1992 には次のようにある。「ギリシア世界はマケドニアのフィリッポスⅡ世によって統一されたが、フィリッポスⅡ世は表に神の胸像、裏面にマケドニアの民族意識の高揚を暗示する騎馬像、戦車競争図な

第二は中国の貨幣様式の西漸。

第三は2言語併用貨幣(ギリシア文字とカローシュティエー文字を一つの貨幣の表裏に用いる)の出現である。

この三つの問題につき、貨幣銘文に使用された文字に着目して模式図を描くと次のようになる。



3-3. 第一と第二の出来事について

第一のギリシア貨幣様式の東漸であるが、その東限は、パミール高原の西、ヒンドークシュ山脈北側のバクトリアが興った地域である。ここはアレクサンドロス大王(在位。紀元前 336-323年)の死後、ギリシアの遠征軍によって建てられた王朝であり、ギリシア文字による王名の属格(～の)を銘文に持つ円形打刻銭が発行された。紀元前 3 世紀中頃のことである²。

第二の中国貨幣様式の西漸であるが、その西限は、パミール高原を西に抜けた現在のウズベキスタン共和国(古のソグディアナの地)のブハラ辺りである。この地からはブハラのタムガ(支配者のマーク)と“開元通寶”という漢字銘文が鑄込まれた円形方孔鑄造銭が出土する。“開元通寶”という銘文は、唐の高祖が武徳四年(621)に発行した開元通寶銭を模倣したものとされるから、ブハラの貨幣は紀元 7 世紀から 8 世紀のものであろう³。この様式は当時東西交易

どを刻印し、発行者たる国王の名前(属格)をギリシア文字で示した。その息子のアレクサンダーⅢ世(大王)はアケメネス朝を前 330 年に滅ぼし、西はエジプト・地中海から東はインダス川・オクサス川に及ぶ大帝國を作った。そして、オリエントにはしだいにヘレニズム文化が熟成していった。大王は表にヘラクレス神、裏面にゼウス神と自分の名前(アレクサンドロスのという属格)を刻印した 4 ドラクマ銀貨を標準貨幣として発行した。表のヘラクレス神は大王の肖像ともいわれるが、以後、オリエント世界にはこの大王のコイン・タイプが踏襲されるようになった。」(54 頁)。例としてアレクサンドロスの名前のある銘文をみると、ギリシア文字で Α Λ Ε Ξ Α Ν Δ Ρ Ο Υ (アレクサンドロスの)、Β Α Σ Ι Λ Ε Ω Σ Α Λ Ε Ξ Α Ν Δ Ρ Ο Υ (王アレクサンドロスの)のように王名(属格)がある。

² もっとも、円形打刻という様式のみでの伝播となると、タリム盆地のホータン一帯で発行されたとみられる所謂“シノ・カローシュティエー銭(ホータン馬銭、漢佉二体銭とも言う)”(紀元 2 世紀後半頃)がある。これは漢字漢文とカローシュティエー文字ガンダーラ語の銘文を持つ円形打刻銭である。なお、張忠山主編 1999 によると、1960 年代に陝西省・甘肅省・安徽省などの地からギリシア文字を模した銘文が鑄込まれた鉛銭が総計 309 枚ほど発見されたという。この貨幣の来歴については様々に論じられており未だ定論がないようなので暫くは考慮の外におくことにする。

³ с м и р н о в а 1981 の 316-318 頁参照。

に活躍したソグド人によって運ばれてきたものである⁴。

以上を要するに、時代としては先にギリシアの貨幣様式の東漸があり、後に中国の貨幣様式の西漸があった。東漸の東限と西漸の西限はともにパミール高原周辺ということになる。銘文に使用されたギリシア文字と漢字の東限と西限もほぼ同様である。なお、ギリシアの貨幣様式の東漸はアレクサンドロス大王の東征を契機とするものであり、中国の貨幣様式の西漸については東西貿易に従事したソグド人に負うところが少なくない。

3-4. 第三の出来事について

第三の2言語併用貨幣(ギリシア文字とカローシュティー文字を一つの貨幣の表裏に用いる)の出現であるが、パミール高原の南にあたるインド西北での出来事である。先に述べたように、ヒンドークシュ山脈の北側でバクトリアが興りギリシア様式の貨幣が発行されたわけであるが、この勢力は、その後ヒンドークシュ山脈を越え、その南側のインド西北部に進出した。新たに進出したインド西北部はカローシュティー文字で書かれたガンダーラ語が行われていた地域であり、この地域への進出の後、支配者の文字と言語であるギリシア文字ギリシア語と被支配者の文字と言語であるカローシュティー文字ガンダーラ語が併記された貨幣すなわち2言語併用貨幣が発行されることとなった。紀元前2世紀中頃のことである。

これ以降、歴代の王によって同種の2言語併用貨幣が発行され続け、その間にギリシア文字とブラーフミー文字の2言語併用貨幣も発行されることもあった⁵。その後、このような2言語併用貨幣はタリム盆地周辺にも現れることになる。①ホータンのシノ・カローシュティー銭(紀元2世紀後半。漢字とカローシュティー文字)、②クチャの亀茲五銖銭(紀元5～7世紀。漢字とブラーフミー文字)である⁶。さらに③ソグディアナ周辺で2言語併用貨幣(紀元7～8世紀。ソグド文字と漢字)が発行された。この流れは、④モンゴル時代の2言語併用貨幣(紀元13～14世紀。アラビア文字とモンゴル文字)、さらにそれより数百年後の⑤清朝の新疆紅銭(ペニセン)(紀元17世紀以降。漢字と満洲文字とアラビア文字)にまで及ぶものとおもわれる。

3-5. 様式の変更が意味するもの

先に述べたように、ギリシアの貨幣様式は東漸し、カローシュティー文字ガンダーラ語が行われていたインド西北の地において期を画するほどの大きな変化をこうむった。それは貨幣の表裏に異なる文字と言語の銘文を採用した2言語併用貨幣(ギリシア文字とカローシュティー文字を一つの貨幣の表裏に用いる)の発行となってあらわれた。思うに、一度確立した貨幣の様式を変えて、これまでにない新たな様式を採用するということはそれほど容易なことではない。しかしながら事實は、2言語併用貨幣という新しいタイプの貨幣が発行されたわけであり、これは貨幣に於ける習慣の大きな変更にはほかならない。なぜこのようなことが可能となったのであ

⁴ なお、後の時代に関わることであるが、ソグド人が用いたソグド文字は西から東へと広がりながら少しずつ改変され、ウイグル文字、モンゴル文字、満洲文字となった。これらの文字による銘文を持つ貨幣も発行されることになる。

⁵ P.L. グプタ 2001 の 24 頁、渡邊 1973 の 22 頁参照。

⁶ 2言語併用の小型の方孔円銭。亀茲は現在のタリム盆地北側の庫車(クチャ)県に相当。玄奘『大唐西域記』(7世紀前半)の屈支国(亀茲)の条に「貨幣には金銭・銀銭・小銅銭を使用している」とある「小銅銭」がこれであるともされる。蘇擘・劉玉榮 1998 の 54-56 頁によると、5世紀～7世紀に亀茲で鑄造されたもので、ブラーフミー文字トカラ語が書いてあるらしい。

うか。支配者側の文字言語(ギリシア文字ギリシア語)と被支配者側の文字言語(カローシュティ文字ガンダーラ語)をそれぞれに表記する必要があったのだと言えば、それはその通りであろう。また2言語を併記した資料もそれほど珍しいものではない⁷。しかしながら、その社会に2言語表記の「必要がある」ということと、アレクサンドロス大王以来続いてきた貨幣様式を大きく変えて2言語併記を貨幣銘文として「採用する」ことの間にはいま一つ何か欲しいところである。

この地でいったい何が起こったのか。私は次のように考えたい。すなわち、インド西北ではギリシアやインドやイランなど様々な習慣を持った民族の接触があったわけであるが、この接触を通して、様式の変更すなわち習慣の型の変更にたいして寛容となる「傾向」が生じており、それが2言語併用の銘文の採用を促したと考えたいのである。そのような考えが許されるとしたならば、2言語併用貨幣が生まれたインド西北のガンダーラ(現在のペシャワールー帯)の地は、その後、革新的な大乘仏教運動の情報発信源となるわけであるが、その運動にとってプラスに働くであろう「傾向」すなわち「変化に対する寛容の傾向」が、その運動に先立って既に醸成されていたということにもなる。

【主要参考文献(発行年順)】

渡邊 弘 1973.『西域の古代貨幣』,学習研究社。

Смирнова О. и. 1981. *Сводный каталог согдийских монет. Бронза*. Москва: Наука.

田辺勝美編 1992.『[平山コレクション]シルクロードのコイン』,講談社。

前田耕作 1992.『バクトリア王国の興亡』(レグルス文庫),第三文明社。

モーリス・ポープ著/唐須教光訳 1995.『古代文字の世界 エジプト象形文字から線文字 B まで』,講談社 学術文庫。

蘇擘・劉玉榮 1998.『古幣尋珍』,文物出版社。

小谷仲男 1999.「シノ・カローシュティ貨幣の年代 一付録『後漢書』西域伝訳注一」,『富山大学人文学部紀要』第 30 号,17-48 頁。

張忠山主編 1999.『中国絲綢之路貨幣』,蘭州大学出版社。

P.L.グプタ著/山崎元一他訳 2001.『インド貨幣史 一古代から現代まで』,刀水書房。

NHK「文明の道」プロジェクト 2003.『NHK スペシャル文明の道 ②ヘレニズムと仏教』,日本放送出版協会。

NHK「文明の道」プロジェクト 2003.『NHK スペシャル文明の道 ③海と陸のシルクロード』,日本放送出版協会。

吉池孝一 2009.「貨幣の道」,『KOTONOHA』古代文字資料館発行(愛知県立大学 E511 内) 第 79 号,12-16 頁。

京都国立博物館編集 2009.『シルクロード 文字を辿って—ロシア探検隊収集の文物』,京都国立博物館。

吉池孝一 2009.「東アジアの漢字関連文字」,『現代中国への道案内 II』(工藤貴正・樋泉克夫編),白帝社。

⁷ たとえば、エジプトのアレクサンドリアからそれほど遠くないロゼッタの地で発見された所謂ロゼッタ・ストーンは紀元前 196 年のプトレマイオス五世を記念する布告をエジプト象形文字とギリシア文字ギリシア語で併記した碑文であり、これはいま問題としている 2 言語併用貨幣とほぼ同時代のものである。以上はモーリス・ポープ著/唐須教光訳 1995 の 115-163 頁参照。